
虚構

光太郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚構

【Nコード】

N8326E

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

「仕事」の遂行のため、アルゲード邸を訪れた悠良、莉啓、怜の三人。動くことのない人形を愛で、夫の帰らない屋敷で幸せに暮らすクレシア＝アルゲード——彼女を縛りつけるものとは。エラン短編集 異世界ファンタジー。

たとえばすべてが、虚構であつたとしても。

想いは確かに、ほんとうでした。

どこまでも白い透き通つた肌を、クレシア「アルゲードは愛おしそうに撫でた。

腕におさまる小さなそれは、月明かりに照らされ、幻想そのものであるかのような陰影を生んでいた。

薄く輝く、絹糸のような金の長い髪。見るものすべてを魅了する、青くつぶらな瞳。ただしその瞳は、瞬くことを知らない。

人形だ。

「きれいなお月様。ね、ミリア」

クレシアは、人形をミリアと呼んだ。

人形遊びをする年代というものをあえて定義づけるのならば、彼女は明らかにそこからはずれているといつて良かった。こけた頬は彼女を実年齢よりも上に見せたが、それを差し引いても、若者とはいいがたい。落ち着いた物腰、目の下にうつすらと刻まれた皺は、少なくとも二十代のそれではない。

クレシアは、ひどく大切なものに触れるように人形を抱きかかえ、その頬に口づけをした。

そうして二人で、月を見上げた。遠い昔から何一つ変わらない、

久遠の月。あたりまえのように満ち欠けをくり返し、いつだって静かに見守ってくれている、柔らかな月。

どれぐらいそうしていたのだろう。

不意に、戸がノックされた。クレシアはゆったりとふり返り、どうぞ、と声を返した。

「そろそろ夕食にしませんか」

戸を開けて表れたのは、赤い髪の美女だった。クレシアよりも二十ほど年下であろう少女だったが、すらりとした体躯と、かわいらしさよりも美しさが際だつ容貌は、すでに完成された美を思わせた。毅然とした立ち居振る舞いは町娘のそれではなく、高貴な香りを漂わせている。

「あら、そういえば、お腹がすいたわ。わざわざありがとう、ユラさん」

クレシアは微笑んだ。

窓辺に人形をすわらせ、シルクのスカートの裾を払って立ち上がる。絨毯の上をすべるように歩き、燭台の火を吹き消した。

それほど空気が動いたわけでもないだろうが、人形がコトリと倒れる。青い瞳が、静かに月を映し出す。

「あの……お人形、とても大切なもののようにですけど。よろしいんですか、あのままで」

ためらうように口にした少女の言葉に、クレシアはただ不思議そうに首を傾けた。

人形を一瞥し、首を振る。

「大切？ まさか。どこでも買える人形よ」

笑みさえ含む声で、そう答えた。

アルゲード邸の調理場で存分に料理の腕を発揮し、テーブルに溢れんばかりの料理を並べ終わると、黒髪黒目、黒服の青年は、さして感慨もなさそうに後かたづけに取りかかった。

黒一色で構成された衣類は、この地方では珍しい、東方を思わせるものだった。黒髪ですら、これほど見事なものはなかなかお目にかかるものではない。いまは、その服の上には白いエプロンが、頭の上には帽子が乗っかっていたが。

背筋を伸ばし、実に手際よく調理器具の類を磨き上げていく。最後に持参の包丁を布で包み、懐にしまい込んだ。エプロンと帽子を手早く取り去り、感情のこもらない息を一つ。完璧な仕事だ。

「パーティじゃないのよ。いったいだれがこんなに食べるの、莉啓」
ひたすらに無表情だった青年——莉啓は、聞こえた声に迅速に反応した。動くことのないように思われた顔中の筋肉が、やわらかい笑みを形作る。

調理場の入り口に立って、呆れたように莉啓を見やっているのは、赤い髪の美女、悠良^{ゆうら}だった。

「大量の食材、どれもこれも保存に適したものではあったが——それでも、これ以上日持ちするものはあまりなかったからな。腐らせるよりは、少しでも悠良の口に入った方がいいだろう」

「あら、そうなの。これだけ大きなお屋敷なのに、使用人全員が休暇中なんて、無計画よね」

さらりと言葉を返し、悠良はダイニングへ戻っていく。アルゲード邸に世話になるかわりに炎の料理人を買って出た莉啓は、この場合、悠良ではなく家主であるクレシアのために腕を振るべきだったが、そういうことを指摘してくれる頼もしい相棒はいまはこの場にはいない。

莉啓に己の存在意義を尋ねれば、「悠良」という答えが返ってくるだろう。料理とて、旅先で悠良の舌を満足させるためだけに覚えたのだ。そういう男だ。

悠良に続き、莉啓がダイニングへ移動したところには、すでにクレシアが椅子にすわって待っていた。普段は使用人も一緒に食事を取るらしく、悠良のいったようにパーティでもできそうなくらいの大きなテーブルだ。

そこに、今夜は悠良とクレシア。莉啓が加わったところで、たったの三人だ。莉啓はクレシアに軽く会釈をすると、悠良の隣に腰を下ろした。皿の数とテーブルの大きさが釣り合っているだけに、それを征服しようという三人が妙に浮いているようだった。

「ありがとうございます、リケイさん。ユラさんから、料理の腕は一流だとうかがいましたが……本当に、まさかこれほどだなんて」
「お口に合うかどうか、わかりませんが。突然のことにもかかわらず、快く滞在を了承してくださって、ありがとうございます。調理器具には手入れが行き届いていて、食材もいいものばかりでした。こちらこそ、感謝してもしきれません」

無表情ながら、莉啓はいつもより長く言葉を口にした。黙ったまま、悠良は胸中で感嘆する。それほどこの料理環境が気に入ったのだろうか、抱いた感想はやや的はずれなものではあったが。

悠良と莉啓と、現在は不在のもうひとりが、突然のアクシデントを装ってアルゲード邸に転がり込んできたのは、今朝のことだ。引っ越すつもりでこの町、サリエルの都にやってきてみれば、手違いで屋敷が取り壊されていた——そういうシナリオになっている。

隣の大邸宅、すなわちアルゲード邸に泣きつくと、ちょうど使用人が休暇中ということで、食事の準備を交換条件に、クレシア・アルゲードは滞在を快諾してくれた。計画どおりだ。

習慣なのだろう、クレシアは右手を掲げて、口のなかで祈りの言葉を唱える。それから、ナイフとフォークを手にとった。それを見届けて、悠良と莉啓も食事を開始した。

食事は十分にクレシアの舌を満足させたようだった。笑みを顔いっぱいに浮かべて、幼子のように瞳を輝かせ、次々に料理を口に運んでいく。その様子に、悠良は思わず顔をほころばせた。

「よかった。クレシアさん、どこか元気がないようでしたから……お口に合ったようで、嬉しいです」

言葉が流れ出てから、その意味に思いを巡らせた。元気がない、と思っていたのは、完全に無意識のことだったのだ。

「ありがとう、ユラさん。お優しいのね。こんな優秀な料理師がついているぐらいですもの、きっと由緒ある家柄なのね」

「いえ、そんな」

謙遜ではなく、悠良は首を左右に振る。どこを否定すればいいのかためらって、結局口をつぐんでしまった。由緒ある家柄、という表現は的確ではないし、莉啓は厳密には料理師というわけではない。「ああ、本当においしい。こういう幸せって、久しぶりな気がするわ。——でも、やっぱり、ぜんぶは無理ね。もったいないけれど。朝食にまわせそうなのは、あるかしら」

ナプキンで口元を拭い、クレシアは黙々と食事を続ける莉啓に視線を送る。莉啓はうなずいた。本当は明日の朝食分は、下ごしらえした食材と合わせてキッチンに分けてあるのだが、クレシアがそういうのなら、いわれたとおりにするまでだ。

「あ、でも、もうひとり——今朝いたもうひとりが、帰ってくると思いますので」

奇跡的に、悠良はその存在を思い出した。ああ、とクレシアが相づちを打つ。

「そうだったわね、レンさんといったかしら。あの子はたくさん食べそうだわ」

あの子、と形容されたことを本人が知れば嘆きそうだが、たくさん食べるというのはそのとおりだった。莉啓の眉が、かすかに不快そうに歪む。彼の分まで用意する気はなかったに違いない。

悠良は苦笑した。それから、一番聞かなければならないことを、口にした。

「……あの、旦那様は、今日は？」

不自然な会話の流れではなかったはずだ。

たくさん作りすぎてしまった食事。その行く末を憂えるのならば、この場にいないアルゲード家の真の主を思うのは当然だ。

ガダル＝アルゲード。複数の商店を持つ敏腕経営者で、この町ではその名は広く知られている。

クレシアの笑顔が、急速に冷えた。
目を細め、感情のこもらない声で、吐き捨てた。
「帰ってこないわ」

*

「ねえ、ボウヤ。遊んでいかない？」

女の口からこぼれたのは、甘い誘いと酒の匂い。

少年は顔を歪め、細い指先から逃れた。豊満な胸に気後れしたからではない、単純に酒臭かったのだ。

「悪いけど、俺はもうちょっと節操のある方が好きだなー」

露骨に鼻をつまみ、最低限の布でしか覆われていない露出された胸を、ごく嫌そうに見る。

サリエルのメインストリートから一本裏通りに入れば、そこは夜の町、いわゆる歓楽街だ。あちらこちらに火が灯され、開放的な酒場や賭場、頑なに戸の閉められた裏宿の類が立ち並ぶ。

灯りの届かない、しかし完全に闇というわけではない絶妙な位置取りで、艶めかしく男を誘う女たち。ふらりと迷い込んだ旅人や、前後不覚に酔った客から金品を奪い取るという輩まで紛れている。町そのものが乱れているわけではない。サリエルの自治には定評がある。孤児や浮浪の姿はなく、犯罪の数も少ない。詐欺まがいの商法も、この都では育たない。だがそれらはすべて、昼の話だ。

夜のサリエルでは、暗黙の了解で、ありとあらゆる商売が成立していた。形があるうがなかるうが、ここでは何もかもが商品として扱われる。

その夜の都に、少年の姿は明らかに不釣り合いだった。

この地方ではあまり見ない、東方を思わせる衣服。ほんの少し長い髪は後ろで束ねられ、右手には自分の身長よりも長い棒を持っている。その棒が、棍、と呼ばれる武器であることを知るものは、この地にはいないだろう。

「だったらこんなところに来るんじゃないよ、レン坊や。女を不快にさせないあらしい方ぐらい、お勉強してから出直しといで」

名を呼ばれ、少年——怜^{れん}は、瞬時に警戒した。眼光鋭く女を睨みつけ、数秒の後、気づく。思わず目を見開いた。

「え、もしかして、おばちゃん？」

「お姉さんと呼びなつて、朝にもいったね。身ぐるみはいで、うちの宿に放り込んだっていいんだよ」

女はわざと顔を近づけ、怜の顔に吐息を吹きかける。怜は顔をしかめた。飲んだわけでもないのに、匂いだけで酔いそうだ。

「朝とは別人じゃん。詐欺だろ、詐欺。情報屋のベギーがこんな格好で客寄せしてるなんて、だれが思うかよ」

「ベギーお姉さんがこんなに美人だとは思わなかったって？ 失礼なガキだね」

「いや、美人なのはちゃんと気づいてた」

ベギーは小さく眉を上げた。おどけたような笑みの怜を、値踏みするように眺める。その真意がどこにあるのかはわからなかったが、降参とばかりにため息を吐き出した。

「……いいだろう、これが今朝の報酬分だ」

その気になればなんでも収納できそうな胸の谷間から、紙切れを一枚。にんまりと笑んで、怜はそれを受け取った。

「ありがと。俺がもつとダンディな紳士だったら誘いに乗ってやれたのに、悪いね、おばちゃん」

「悪いと思うなら、情報料もつと払いな。旅人に対する仕事にしちゃ、破格なんだ。食いつぶれちまうよ」

「出世払いで」

仕事が終わってしまえばこの町を訪れることは二度とないだろうが、怜は適当なことを口にする。それはベギーにも伝わったのだろう、彼女は苦々しく笑った。

「ダンディな紳士になったら、またおいで」

密かなにぎわいを見せる夜のサリエルの一角に、他よりもいつそう華やぐ店があった。

翡翠の小麦亭——ガダル・アルゲードの出資により成り立っている、飲食店だ。

陽が落ちると同時に開店し、暗闇を待つ間もなく、店のまわりが銀の装飾の施されたランタンで囲まれる。中に入らずとも、開け放たれた大きな扉から、異国の衣装をまとった娘たちが踊る姿が見え隠れし、行き交う人々の心を揺らす。

しかし今日は、店に入ろうとする客はいなかった。歓迎、とばかりに開放的なゲートの前に、強面の男が三人、立ちはだかっているのだ。大きさがすでに、常人のそれではない。多少の肌寒さをもつともしないむき出しの両腕は、筋肉が盛り上がりすぎていて作り物のようだ。

少しばかりの経験と、処世術を心得ているのならば、決して話しかけようとはしない類の人種。事実、だれもが近づこうとせず、遠くを通り過ぎていく。

「今日は何か、催し物でも？」

場の空気とはまったく無関係に、怜は飄々とそのうちのひとりに話しかけた。パン屋の主人に本日のオススメを尋ねるかのような、ごく軽い口調だ。

大男の眉が、ぴくりと動いた。

無言で、怜を見下ろす。男よりも二回りは小さい少年。害はないと判断したのか、男の表情はそれ以上変わらなかった。

「貸し切りだ」

重点音で、一言。怜の質問に正確には答えていないが、それ以上は問答しないという意志がはっきりと見て取れる。

しかし、怜は引き下がらなかった。

「俺、旅の途中でここに来てるんだけどさ。滞在中に、この店に入るチャンスはあるかな。せっかくサリエルに来たんだ、こんな豪華な店で飲んでみたい」

男の口元が、不快そうに歪んだ。

「貴様のような小僧の来るところではない」

「あれ、入店拒否？ 残念、おもしろそうなのに」

「帰れ。目障りだ」

有無をいわせぬ口調だ。去らないのならば実力行使、といわんばかりに、男の筋肉が動く。

怜は長い棒を持ったままで、器用に頭の後ろで手を組んだ。実力行使、で突破するのもおもしろそうだが、そんな騒動を起こしたところで利点などない。

「じゃ、おとなしく帰ります」

敬礼の形を取って、男たちに背を向ける。

そのまま歩き出す怜の腕を、唐突に、場にそぐわない細い手が引いた。雑踏のなか、大通りに向かう路地へ引き込む。

少女だった。怜と同じぐらいか、それよりも幼いかもしれない。

銀色の長い髪を振り乱し、彼女は怜の腕をつかんだまま、必死に歩みを進めていく。抵抗するのは簡単だったが、あまりの懸命さに、怜はおとなしく従った。どうせ、これ以上は動けないのだ。

サリエルの夜は、メインストリートに近くなればなるほど、かえって静寂が増す。歓楽街独特の、香水とアルコールの混ざった匂いが遠のいたころ、少女は歩みを止めた。

「……あんた、ママとどういう関係？」

止まるやいなや、上がった息を整えようとせず、少女は怜を睨みつけた。青い大きな瞳が、まっすぐに射抜いてくる。

ママ、という響きに、怜は思考を巡らせた。思い当たらない。

「どちらのママさん？ 心当たりがないけど」

「ウソ。ママの家にまで居座って、ガダル＝アルゲードのこと嗅ぎまわって、どういっつもりさ」

怜は唇を曲げた。やっと思いが当たったわけだが、話が繋がらない。ママの家に居座る、ということは、ママというのはクレシア＝アルゲードに相違ないだろう。しかし、それならば、クレシアの夫で

あるガダル「アルゲードは「パパ」ということになるはずだ。それに、下調べの段階では、現在アルゲード家に娘はいない。

「君、名前は？」

「だれが教えるか！ 質問に――」

「俺は怜。どうぞよろしく」

棒を左手に持ち替え、怜は右手を差し出した。少女の頬が怒りで紅潮する。

「バカにして！」

怜にその気はなかったが、そのように映ってしまったらしい。少女は右手をはね除けた。

大げさに手をさすりながら、怜は少女の姿をこっそりと観察した。口調や気丈な様子からは、高貴な身分というよりは、下町の娘といった印象を受ける。しかし、この格好はどうだろう。真つ白な薄手の外套に、同じ素材の丸い帽子。その手の知識のない怜からみても、高級であることぐらいはわかる。

「名前を教えてくださいたら、こっちも教えるよ。名も知らないお嬢さんに、あれこれ話すほど優しいお兄さんじゃないんだ。いや、優しいけどさ」

少女は鼻の穴を広げるようにして、唇を突き出した。そのあまりにも洗練されていない仕草に、怜は親近感すら覚える。衣類だけが浮いてしまっているかのようなのだ。

「……ミーマ。ミーマだよ。満足かい。さっさと教えな！ それにあんただって、あたしとたいして変わんないじゃないか。オトナ面してんなよ」

吐き捨てるように名を告げる。口調は先ほどよりもいっそう汚くなった。

だが怜にしてみれば、口調の善し悪しなどどうでもよかった。表には出さないよう、急速に考えを巡らしていく。ミーマ。重要な名だ。

「その様子じゃ、知ってるんじゃないの、ミーマちゃん。サリエル

に引越してきたはいいけど、譲り受ける予定だった家が手違いで取り壊されてたんだ。クレシアさんのご厚意にべったり甘えて、とりあえずお世話になってるんだけど」

「だったらなんで、ガダルのことを調べる必要がある？ 情報屋にまで頼んでさ。おかしいだろ」

怜はかすかに目を見開いた。まさかこんな少女の口から、情報屋という言葉が出てくるとは思わなかったのだ。

「……うーん、じゃあ、教えよう」

相づちを打ちながら、いいわけを考える。考えると同時に、口から言葉が流れ出た。

「実は、俺の雇われ先で、サリエルで新しい商売を始めようっていう動きがあつてね。この町で商売をやるなら、実権を握っているガダルさんを無視できないだろ。だから、情報が必要なんだ。……内緒だよ、これ」

できるだけ解釈の幅を持たせて、そう説明する。ミアと名乗った少女は、眉根を寄せて考え込んでしまった。真意をはかりかねているのだろう。

やがて、瞳を上げた。ごく小さな声で尋ねる。

「ガダルの敵、つてことか」

怜は素早く対応した。

「まあ、そうだね。けど敵なのは、あくまでガダル＝アルゲード。クレシアさんには、心から感謝してるよ。うまくいつてないんだろ、あそこ」

「……………なら、いい」

ミアはぶっきらぼうに答えると、踵を返した。そのまま、怜の方をふり返ろうとせず、暗闇のメインストリートへ消えていく。ひとりになつてしまえば、後方からのかすかな喧噪がいやに耳についた。怜はため息を吐き出し、急遽追加された本日のもう一仕事に取りかかるべく、気配を消して地を蹴った。

客間の丸テーブルに、緑鉱石の装飾が散りばめられた見事なティセット。

加工された赤い花びらをカップに浮かべ、柑橘茶を注ぐ。上品な甘い香りが漂った。

「珍しいわね」

カップを手に取り、匂いを楽しみながら悠良がつぶやく。テーブルの脇に焼き菓子の盛られたトレイを置き、莉啓は微笑んだ。

「ガダル」アルゲードが東のラスカから取り寄せた、特別な茶らしい。王宮御用達という触れ込みだ。故郷を思い出す味だろう」

「そうね、お母様が好きそう。悪くないわ」

ほんの少しを口に含み、悠良は満足そうにうなづく。その隣で、悠良の満足がそのまま三乗で自分の満足といわんばかりの満ちた顔で、莉啓も何やらうなずいている。

その二人の眼前を、羽毛枕が飛んでいった。

風でなびいた髪を、悠良は優雅に整える。莉啓は不機嫌さを隠そうともせずに、枕弾の発射口に目をやった。

「邪魔だ」

一言。

枕を投げつけた主である怜は、いま起きたばかりの乱れた頭をかきむしるようにして、優雅組を睨みつけた。

「邪魔ってなんだ！ あんな、俺がひとりで働いてる間、おまえら何してたわけ？ 王宮御用達の茶だ、あらおいしいわ、ってなんだそのやりとり！ 避暑か！ バカンスか！ せめて他の部屋でやれよっ！」

ほとんど泣きそうな声で叫ぶ。しかし、彼の熱い情熱は、そのまま二人を通過して、突き当たりの壁に吸収されてしまったようだっ

た。何一つ跳ね返ってこない。

ぶつぶつぶやきながら、怜はベッドから足を下ろし、布製のブーツに足を通り込んだ。手首に巻きつけてあった紐で、短い髪を素早くくくる。窓の外の太陽がまだ昇り切っていないことはわかっていたので、あえてそちらは見ないようにした。まったく寝足りない。「朝食の時間になっても起きてこなかったから、わざわざここで、あなたが起きるのを待っていたのよ。何が不満なの？」

意志の強い目をそっと細め、皮肉でも何でもなく、悠良が問う。

「貴様の仕事の首尾を聞かないことには、こちらでも動けないだろう。帰ってきた早々に報告もなしで眠るとは、いい身分だな」

淡々と、莉啓の追い打ち。

怜は泣きそうになった。

「明るくなり始めるのと鳥が鳴き出すのはどっちが早いんだろう、とか、そういうことを考えたことがありますか。ないだろ。ないよな。俺が帰ってきたのはそういう時間だ！爆睡中でもかまわず、起こせば良かったか？」

卑屈な気分になりながらも、思いをぶつける。悠良は形のいい眉をひそめ、口元に手をやった。

「怜、あなた、朝帰りなの？」

「歓楽街に行っただけ、朝帰りか。百年早いな」

「ちがうだろ！せめて十年っていえよ！いやちがう、それもちがう！」

冷ややかな目が怜を射抜く。この仕打ちはどうしたことだろう。

毎度のことながら、三人の「仕事」の役割分担に不満を覚えずにはいられない——のだが、あまりに毎度のこと過ぎて、怜は九割九分諦めていた。長く長く、息を吐き出す。

「も、いいから……メシ……」

なけなしの期待をこめて、絶望的な思いでつぶやく。いくら健気に働いたところで、怜の分の料理がしっかりと用意されていることなど希だ。

「起き抜けで食事か。相変わらず化け物だな。クレシアさんの許可を得て、ここに持ってきてある。できたてではないが、食べるか？」
莉啓の言葉に、怜は目を見開いた。夢か、とまず思う。もしくは何かの罠か。

悠良のためにしか包丁を振るわない莉啓が、怜の分の食事も用意し、なおかつ部屋まで持ってきているという。

鳥肌が立った。

感動のためか、恐怖のためかは判断が難しい。

返事もできないでいたが、是ととったのだろう、莉啓は扉を開け、廊下に準備してあったらしい銀のトレイを運んできた。悠良の座る丸テーブルとは別の、四角いテーブルに無造作に並べる。事務的に終え、これ以上することはないとばかりに、悠良の隣に腰を下ろした。自分の分の柑橘茶を注ぐ。

「すげえ」

大きすぎる感動は語彙の欠落を生んだ。しかしそれで、充分だった。

怜の知る限り、莉啓のレパトリーのなかでも手の込んだ料理の数々。美しく盛られているとはいいいがたいが、それでもしつかりと量が確保されている。

「いただきます！」

無邪気な子どものように顔を輝かせ、怜はナイフとフォークを手にとった。

その輝く姿が眩しくて、悠良はそつと目を逸らす。彼女は知っているのだ。昨夜の残りが、そのままこっそりここにやってきているという事実。

それほど暑いわけでも、多湿というわけでもない。そう簡単に痛まないはず、きっと大丈夫に違いない——そういいきかせ、悠良はその事実を伝えることにした。

その方面の大会に出られそうなほどの勢いで、料理すべてをペロ

りと平らげた怜は、早速昨日の「収穫」を話し始めた。

「ガダル＝アルゲードについては、まあ、町の噂でちょっと聞いたとおり、人間的にはロクデナシだね。金になることはなんでもやるらしい。今回は情報屋つてのを利用してみたけど、それぜんぶ信じるなら、そりやもうやりたい放題って感じ。ついでに、女癖も非常に悪いらしく、あちこちに愛人や隠し子がいるとか——まあ、もと、クレシアさんとの結婚は金目当てで、若いころから愛人はそこらじゅう、ってことらしいけど」

「情報屋」

悠良のための柑橘茶を新しく作りながら、莉啓がその一言に反応した。

「それは随分、楽しめたな」

「うええ、そこ突っ込むのかよ。事前に情報屋に頼んどくつてのはよくやるだろ。有名人なら、利用できるものは利用した方が早いだろうよ」

ぶつくさ文句をたれながら、怜は隙を見ていたての柑橘茶をかつさう。自分でやるほど飲みたいわけでもなかったが、少々気になっていたのだ。一気に飲み干して、空の皿の隙間に置く。

「なんだこれ、甘い」

思わず漏れた感想に、莉啓の殺気を感じた。取り繕うよりも早く、悠良がすつと立ち上がり、怜の目の前のカップを取り返す。ごく自然な動作で、莉啓に差し出した。おかわり。

莉啓は眉をひそめ、布巾で丁寧にカップを磨き始めた。

「もうちよつと具体的に聞きたいわ。お金になることはなんでもやる、ってというのは、たとえば、どんな？」

悠然と足を組み、悠良が問いを投げる。そこ聞くの、と怜は苦笑した。あまり聞かせたい話ではない。

「店にまで行ってみたけど、結局本人と接触はできなかったし、確証はないという前提で——まあ、人身売買、だね。他には、珍しい眼球や髪、手や足なんかの、部分ごとのやりとり。表向きの交易よ

りも、こっちの方が儲けは大きいんじゃないかって話」

悠良は、不快そうに眉根を寄せた。思うところはあるのだろうが、それが言葉になることはなかった。氣遣うような目線を送りながら、莉啓が新しく入った茶を置く。

「他に収穫は」

いつもの声で、淡々と、先を促した。

少し考えるような素振りを見せ、怜はにんまりと笑う。話すべき、大きな収穫があった。

「ミーアっていう女の子に会った」

怜の期待したとおり、悠良と莉啓の表情に、緊張が生まれた。

ミーア。珍しい名前ではないが、偶然とも思えない。

「どういうこと？」

「向こうから話しかけてきたんだ。ママとどういう関係だ、ってね。ちよつと話した印象では、クレシアⅡアルゲードを慕っていて、ガダルⅡアルゲードは敵視してるみたいだった」

「馬鹿な」

ごく短く、莉啓がつばやいた。怜がうなずく。その感情は、まさに怜が抱いたものと同じだ。

「あとをつけてみたら、この屋敷からメインストリートを挟んで反対側の僻地、もうほとんど森のなかの、立派なお屋敷に入っていた。ここほどの規模ではないけどね。そっちには、今日、もう一回接触してみるつもり。ガダルⅡアルゲードの方は、啓ちゃんに任せろさ」

「それは困るわ」

悠良が首を振った。

「ここにいられるのは、莉啓が料理人ということになってるからよ。あまり屋敷を空けるわけにはいかないでしょう」

「……むー、そうか。まあ、ここに世話になってれば、会うこともあるだろ、自分の家なんだし。そこんところは果報は寝て待て、ってことで」

「果報、ね」

そのあまりにもかけ離れた表現に、莉啓は薄く笑った。

*

町に出ようと思うのだが、一緒にどうか——部屋まで悠良を誘いに来たクレシアの言葉に首を横に振るはずもなく、悠良は同行を承諾。食材の買い出しを理由に、当然のように莉啓も同行を申し出た。朝のサリエル。市場が開き、看板が立ち並び、人々が行き交う。活気に満ちた町の姿だ。

「何を買われるんですか」

クレシアと悠良が並んで歩き、莉啓がその一歩後ろに行く。誘いに来たわりには話題を提供する気もないらしいクレシアに、悠良が話しかけた。特に知りたい情報でもなかったが。

淡い茶のロングカーデイガンに身を包んだクレシアは、衣類そのものが自分を演出する一部であるかのように、裾を翻しながらゆったりと、悠良に向き直った。

「そうね。何を買おうかしら」

しかし、帰ってきた言葉はそれだけだった。そのまま前向き、静かな足取りで歩いていく。

問いを重ねようとして、やめた。悠良は無言で、クレシアの隣にいることに専念した。あれこれ考えても仕方がない。

バスケットを提げた貴婦人たちや、買い出しの少年少女が、右に左に通り返ぎていく。今日はこれがおいしいよ、じゃあそれをいただきますかしら——そんなあたりまえの会話が、まるで架空のできごとであるかのように、クレシアたち三人の頭上に行く。

莉啓は、ふと、違和感を覚えた。

そんなことあるはずがないのに、三人の姿だけが、他から見えていないかのようなだった。

うまく言葉にならない、得体の悪さ。もしかしたら、彼らの「仕

事」の対象はいつも、こんな感覚でいるのかもしれない。

「そうだわ」

不意に、クレシアが足を止めた。

「ミアにお洋服を買っていいかしら」

何気なく発せられた言葉だったが、悠良と莉啓は思わずびくりと反応してしまった。

「お洋服、ですか？」

「そうよ。ユラさんも一緒に選んでくれるかしら。どうしても、似たようなものばかりになってしまうの、わたしが選んではかりだ」
「にこやかに返され、ええ、と悠良は返事を口にする。もちろんかまわない。かまわないが、ミアとは、いったいだれを指すのか。明確な目的を持ったからか、先ほどまでよりもよほど足早に、クレシアは歩みを進めていった。悠良と莉啓は、黙ってそれに続いていく。」

食材を扱う商店や、カフェの並ぶ通りをすぎると、雑貨や衣類の立ち並ぶ一角にたどりついた。迷うことなく、行き慣れた様子で、クレシアはそのうちの一軒に足を踏み入れた。

「いらっしやい」

店のなかで迎えたのは、ふんだんにレースの散りばめられたワンピースに身を包んだ、ひとりの老婆だった。白髪を飾る大きな赤いリボンは、年甲斐もないといってしまえばそれまでだが、それほど違和感があるというわけでもない。

クレシア、悠良、と店に入っていく、あとに続こうとしたものの、莉啓は思わず立ち止まってしまった。

躊躇させるだけの空気がそこにはあった。

あまりにも少女趣味の店内。

赤とピンクが色彩のほとんどを占めている。レースのカーテンが店中を飾り、そこかしこにぬいぐるみが飾られている。足を踏み入れずとも、花の甘い香りがあふれ出てきていた。

逡巡したものの、莉啓は意を決して、足を踏み入れた。

これも仕事だ。

「あらあらあら、いらつしゃい。綺麗なお嬢さんと……あら珍しい、綺麗なお兄さんね。クレシアったら、綺麗どころを二人も連れて、いいわねえ」

老婆はカウンターから身を乗り出し、気乗りしない莉啓の表情を察してか、わざとらしく鼻先を近づけてきた。できるだけ気づかないほどの所作で、莉啓は小さく身を引く。本当ならば、存在そのものを視界から消してしまつて、決して近づきたくない類の店だ。

「いやだ、お買い物に来たのよ、見せびらかしに来たんじゃないわ。新作はできてる？ ミーアのお洋服」

莉啓を庇うつつもりでもないだろうが、クレシアがそう促す。老婆は微笑んで、店の奥に姿を消してしまつた。しばらくの後、両手に洋服を抱えて、満面の笑みで出てきた。

「クレシア、来るの久しぶりでしよう。たくさんできてるわよ」

「そうだったかしら」

不思議そうにまばたきをして、クレシアが首を傾げる。カウンタ―越しに、老婆はクレシアの額をこづくような仕草をした。

「そうよ、この量ができるぐらいに久しぶりよ。ご無沙汰の間、どうしてたの。繁盛しているお店じゃないんだから、あたし、寂しかったわよう」

そういつて老婆が広げたのは、人形のための衣装だった。細かな装飾の施された、ドレスの数々。帽子や手袋など、小物の類を除いても、優に七着ある。

「どうしていたのかしら。よくわからないわ」

老婆の問いに、クレシアはただ微笑んだ。ごまかす素振りもない。「作品」を一つ一つ手に取り、実に幸せそうに眺めていく。

店内をぐるりと見わたして、特に興味を見出さなかった悠良は、人形の衣装に注目した。横から、失礼にならない程度に、のぞき込む。

「クレシアさんが、ミーアと呼んでいたお人形のお洋服ですか？」

何も知らないふりをして、さらりと問う。一瞬、莉啓に緊張が走ったが、それにも我関せずを決め込んだ。このあたりのやりとりが、怜に似てきたように思えて、莉啓は胸中で齒がみする。危険に自ら足を踏み入れるような行為は、やめてもらいたいのだが。

「そうなの、ミーマもね、ここのお店で買ったのよ。リケイさんには居心地が悪いかもしれないけど、いかにも女の子の好きそうなお店でしょう。時々こうやって、お洋服を作ってもらうのよ」

「かわいいお人形ですよ」

「でしょう。ミーマにそっくりなの、青い瞳がね」

笑顔のなかでつぶやいた言葉の違和感に、クレシア自身は気づいていないようだった。どこか遠くに思いを馳せているかのように、うつとりと目を細めている。

悠良がさらに質問を投げようとしたのに気づき、莉啓が慌てて割り込んだ。

「ミーマ、というのは、人形の名では？」

彼にしてみれば、迂闊な問いだ。しかし、クレシアは意に介した様子もなかった。

「娘よ。娘の名前。とてもとてもかわいくて、物わかりが良くてね。大好きな娘なの」

そういいきられてしまっでは、それ以上聞けなくなってしまった。そもそも、「ミーマ」という名がだれを指すのか、彼らは知っているのだ。

ミーマ＝アルゲード。幼くして亡くなったという、クレシアの一人娘。

「そういうことは、深く聞くもんじゃないわよ」

老婆にもたしなめられ、二人は口を紡ぐしかなくなる。やはり、こういう情報戦はどう考えても向いていない。必要がなければ世間話などしそうにない、口べたな二人なのだ。

「これ、ぜんぶいただくわ。お代は、家のものがまた払いに来ると思うから」

決して安い買い物でもないだろうが、クレシアは平然とそう告げた。一着一着を丁寧に薄紙で包みながら、老婆は思いついたように顔を上げる。

「クレシア、あなたのところのお屋敷、ずいぶん前から人払いしてるでしょうよ。ちよつと噂になってるわよ、だれも買い出しに来ないって。多少の暇ならありがたいんでしょうけどね、あんまり長期じゃあ、使用人らも食いつぱぐれちゃうわよ。雇い主として、そのあたり、考えてあげなくちゃあね」

「そうね」

クレシアはただ一言、答えただけだった。出来上がったピンク色の包みを受け取り、それじゃあ、といい残して、店から出て行く。追うべきだと判断し、悠良は慌ててあとに続いた。

残った莉啓が、そつと老婆に問うた。

「使用人に暇を出したのは、つい最近のことだとうかがったのです——現在、臨時の料理人のようなことをしているので、気になつて」

とつてつけたような理由になってしまったが、老婆は気にしていないようだった。そうだったの、と笑って、それから声をひそめた。「変だな、とは思っているんだけどね。もう一ヶ月近く経つかしらね。生まれついてのお嬢様だから、クレシア、ひとりやっていくのは大変だろうと思うのだけど」

一ヶ月——それは、重要な言葉であるように思われた。

礼を告げ、莉啓も店をあとにした。

*

アルゲード邸からメインストリートを越え、集落の向こうの農道も通り越し、隣町へ続くソレイユの森の入り口付近、ほとんど人の寄りつかない僻地に、その屋敷はあった。

真新しい外観ではない。石造りの壁には植物が根付き、まるで最

初から森の一部であつたかのように、景色にとけ込んでいる。

その屋敷の重い石扉を開け、白い外套を着た、銀髪の少女が顔を出した。夜のサリエルで、怜にミアと名乗った少女だ。ミアは周囲の目を気にするような素振りをしたが、もともと人気がない森のこと、すぐに目線を正面に戻し、足早に歩き出した。

木の上から様子をうかがう、長い棒を携えた怜の姿には気づかないようだった。

「お、動いたねー」

口笛を吹き、棒をくるりを回すと、怜は地面に降り立った。気配を消し、そつと、ミアのあとを追った。

町に出てしまえば、ミアは人目など関係ないとばかりに、胸を張って歩いていった。心なしか速度も遅くなり、知り合いでもないであろう町の人に愛想を振りまきながら、進んでいく。以前話した印象とのあまりの違いに、怜は内心で舌を巻いた。十代半ばほどであるが、すでに様々な表情を使い分けている。

そのうちに、ミアはするりと裏通りに入った。昼間の裏通りだ。開いている店もなく、閑散としている。夜のような活気はもちろんなく、不気味なほどに静まりかえっていた。

人通りのない道を、脇目もふらず歩いていく。怜も後を追おうとして、立ち止まった。

外套と銀の髪を揺らしていた後ろ姿が、唐突に消えてしまったのだ。

「うわ、しまった」

怜は立ちすくむしかなかった。まさか、何の心得もない少女を見失うとは思わなかった。

考えたのは一瞬だ。あとを追う術もなく、かといってあてもなく捜しまわるようなことをするつもりもない。怜は唯一開いている宿にすべりこんだ。

「おばちゃん、ちょっと助けて！」

「おや、レン坊や。そんなにあたしに会いたかった？」

カウンターの向こう側でニュースペーパーを広げていた女が、ゆつくりと顔を上げた。ゆつたりとした黒いローブに身を包み、髪は高い位置で無造作にくくられている。着飾った様子もなく、化粧気もまったくないが、夜の町で肉体美を披露していたベギーに他ならない。情報屋のベギーだ。

「ミリアって名乗る女の子、知ってるだろ。銀色の髪の、かわいい子。こっちに來たかと思ったら、姿を消したんだ。どこに行ったか、教えて」

ベギーは小さく眉を上げた。カウンターから身を乗り出している怜に、身を寄せる。

「ちよつと本気な姿もいいねえ、坊や。はやくダンディな紳士になりよ」

「ベギー、俺、急いでるんだけど」

ベギーは苦笑した。

「確証のあるいいかただったね、あたしが知ってるって。いまだけ名前を呼んだのは計算かい？——いいだろう、あの子のことはあたしも心配だ。すぐに追いな。あの子が馬鹿なことする前にね」

カウンターからメモをちぎり取ると、さらさらと記していく。地図のようだ。数秒で書き上げて、差し出した。

「どこに行ったの」

受け取りながら、問う。ベギーは肩をすくめた。

「ガダルのところさ——たぶんね」

「——君は、だれだね？」

夜になれば光り輝く、翡翠の小麦亭。

いまは暗いその一室で、ベッドに横たわる人物がいた。

あごひげを蓄えたその男は、一糸まとわぬ上半身を起こし、唐突に開いた扉を見やる。そこにいたのはミアだ。銀の髪と、青い瞳を持つ少女。暗闇と暗闇とを繋ぐ扉の前に、堂々と立っていた。

「ガダル」アルゲード、さん。話があるわ」

「話。いま、この状況で？」

呆れたように男——ガダルが笑う。傍らのシャツが、小刻みに震えた。

「いいじゃない、カワイイお客様。アタシはかまわないわよ、ガダル」

「オレは少しかまうんだが」

ガダルは眉を上げ、ベッド脇のローボードに放ってあった黒いコートをまとう。ベッドの女にキスを落とすと、革靴に足を通した。

「部屋を変えようか」

ミアは逆らわなかった。そのまま、暗い部屋の戸が閉められた。

通されたのは、応接間だった。

一階が酒場、二階が宿を兼ねた客室となっているようだ。三階は特別な客を招くためだろうか、廊下には茶の絨毯が敷き詰められ、扉の装飾も明らかにそうとわかる上等なものに変わっていた。

そのうちの一室、応接と札の掲げられた部屋のソファに、ミアは勧められるままに座った。四つの赤いソファ。涼しくなる季節を意識しているのか、ホーグル毛のソファカバーがかけられている。

向かい側に、ガダル「アルゲードが腰を下ろした。ちゃんとした

衣類を着る気もないらしく、黒のコート姿のままだ。

「わざわざ裏口から潜り込んできたのかね。用件は？」

ガダルはそつと足を組んだ。あごひげを撫でるようにして身を屈め、ミーアの瞳を見つめる。

喉はからからだった、ミーアはありもしない生唾をむりやり飲み込んだ。喉が焼けそうだった。吹きだそうとする汗を押さえ込んで、るつもりもないが、まるで直立不動を命ぜられているかのように、細胞のすべてが固まってしまったかのように。

それでも、ここまで来たのだ。

逃げ帰る気もなかった。

「お金が欲しいの」

息継ぎをしまつてはくじけそうだった。ミーアは一息で告げた。

「金」

一言、ガダルは返した。たつぷりと数秒をかけて、足を組み替える。

「……君のその無邪気な願いが、何を意味しているのか、知っているかね」

「わかつてる。だから来た——ん、です。あたしは、どうしてもお金が欲しいの。そのためなら、どうなってもいい」

ガダルは眉を上げた。その表情から感情は読みとれなかったが、少なくとも、ミーアに興味を持ったようだった。商品を見るような目で、その銀色の髪、青い瞳、白い肌を、一つ一つ物色する。

ごくりと、もう一度、ミーアの喉が動いた。

ガダルが立ち上がったのだ。

「上等な衣類を着ている。良い家柄のお嬢さんだろう。お金に困っていると思えないが……ここへ来たこと、その度胸を考えれば、まったくのものの知らずというわけでもなさそうだ。——名は？」

「ミーア」

名を聞いた瞬間、わずかに、ガダルの頬が動いた。

だが、それだけだった。

ガダルの大きな、無骨な手が、ミーアの頬に触れた。もう一方の手は、その銀色の髪を撫ぜた。

「いいだろう」

瞬間、ミーアは息を吸い込んだ。いままで動けなかったことが信じられないほどの機敏な動きで、右手を外套の中に差し入れる。そこにある固い柄を握りしめ、一気に引き抜く。

しかし、刃がきらめくよりも早く、小さな手は抑えられた。ガダルは難なくダガーを奪い取り、見せびらかしてもするかのように、高く高く掲げてみせた。

「幼稚な」

つぶやいて、嘲笑する。

それでもミーアは引き下がらなかった。立ち上がり、懸命につまさをのばす。両手をあげ、ただ一つの武器にすがろうとする。

「返せ！」

その手は届かない。どうしても、届かない。

「いい覚悟だ。その覚悟で来たのなら、こちらとしても商品として利用しがいがある。ミーアといったね。君にとって最良の、買い手を探そう」

「じゃあ、俺が買おうかな」

ガダルとミーアの間僅かな隙間に、鋭い衝撃が突き抜けた。

ミーアの目では、何が起こったのか、すべての事象を捉えるのは不可能だった。ただ、驚愕の一瞬ののちには、すぐ目の前にいたはずのガダルの身体がソファに叩きつけられ、ミーアの身体は頼もしい腕に抱えられていた。

ミーアは、腕の主を見上げた。見知った顔だ。レン、と名乗っただろうか。左腕にミーアを、右手には長い棒を携えている。その表情は、怒っているように見えた。

「——だれだ、どこから」

腹部を押さえて咳をくり返し、苦痛に顔を歪めてガダルが目線を

上げる。ミアを抱えたままですつと腰を落とし、怜は目を細めた。
「名前はどうでもいいだろ。どこからつてのは、その扉から。も
っと知りたいなら、もちろん裏口からつてことになるかな。この
店に入るルートが、三件隣の廃墟の地下つてのはやりすぎだね、お
じさん。どこの秘密組織だよって話」

「オレを殺す気か」

じりじりと、ガダルは後方へ下がった。ソファの後ろの、奥の扉
の前まで動く。

怜は鼻先で笑った。

「なるほどね。おじさんが、殺される心当たりが満載だつてことが
よくわかった。——でも俺にその権限はないんでね。さっきの一撃
でこの子を買いたいんだけど、足りない？」

ガダルは眉を寄せた。ほとんどすぐに、結論が口から滑り出る。

「充分だ」

「おりこう」

微笑んでみせて、怜はもう一撃を繰り出す。額の中央に棒を突き
つけると、当たっていないにも関わらず、風圧でガダルの髪が舞い
上がった。そのままずると、尻をつく。腰がくだけたのだろう。
怜はミアを抱えたまま、部屋を出た。扉を閉め、そのままずん
ずんと歩いていく。

「離せ！ あたしはあいつを殺すんだ！ まだ殺してない！ あた
しは死んだっていいんだ、かまわないんだから、離して——！」

やっと我に返ったミアが、腕のなかでじたばたともがく。怜は
そちらを見ずに、冷やかにいい捨てた。

「悪いけど、お兄さんはちょっと怒ってるよ」

おどけた台詞ではあったが、本気の怒りが感じられた。ミアは
口を開いたが、空気だけを吸い込んで、結局はそのまま黙るしかな
かった。

アルゲード邸の正門を開け放ち、嫌がるミアを抱える力は微塵

も弱めず、怜はずかずかと邸内に上がり込んだ。ベルを鳴らすべきかを考えたのはほんの一瞬のことだ。

「何ごとだ」

突然の来客に駆けつけてきたのが見慣れた相棒であったことに、思わず破顔する。しかも、エプロンと帽子のコックスタイル。あまりに似合いすぎていて、突っ込むことすら忘れそうだった。

「啓ちゃん、すっかり板についてちゃって。もう料理人として職探したら。高給取りになるんじゃないの」

「貴様は誘拐魔に転職でもしたか。どういっつもりだ。同意の上で連れてきているようにも見えないが」

莉啓の目が冷ややかに光る。そこでやっと気づいたかのように、怜はミリアを床に下ろした。それほど強い力で抱えていたつもりもなかったが、解放されたたん、ミリアは平衡感覚を失ったようによろめいて、尻餅をついてしまう。莉啓の一層冷たさを増した視線が突き刺さり、怜は苦笑するしかなかった。

「や、これはどちらかという人助けなんだけどな。ね、ミリアちゃん」

笑って、ミリアの顔をのぞき込もうとする。しかし、無言で小さな手のひらが突き出された。これ以上寄るな、とでもいいただ。

「……人助けか」

「うわ、信じてないな。人助けだよ。余計なお世話だったんだろうけどさ。啓ちゃん、悪いけど、気分が落ち着く飲み物何か。悠良ちゃんに作るぐらいのつもりで、どうぞよろしく」

「いいだろう」

莉啓はさつと踵を返す。状況ぐらいは察してくれる相棒だ。おそらく、自分の分の飲み物はないだろうが——そんなことを思いながら、怜はミリアの手を引く。まさか、廊下で話し込むわけにもいかない。

「とりあえず事情を聞かせてよ。クレシアさんにばらすような真似はしないからさ」

心にもないことをいった。クレシア、という名に反応したのか、ミアはおとなしくうなづく。どの部屋に行くべきか逡巡し、怜は結局莉啓のあとを追った。調理場脇の小テーブルあたりが無難だろう。

クレシアのことをママと呼ぶわりには、ミアは屋敷の内部に精通している様子もなかった。不安そうに――観念した様子ではあったが――怜に連れられるままに歩を進めていく。たどりついた場所が調理場で、勧められたのが客用ではない木の椅子であると知ったとき、ミアはやっと安心したように息を吐き出した。翡翠の小麦亭と同じ展開を危惧していたのだろう。

まかない用か、それとも小休憩用なのか。落ち着いた長い時を過ぎすにはあまりにも小さい丸テーブルに、莉啓はホットミルクを置いた。自分は調理台にもたれかかり、腕を組む。

椅子が二脚あったので、怜はミアの隣に腰をおろした。

目の前に甘い香りを漂わせるホットミルクを差し出され、ミアは警戒も遠慮もなく、かみつくようにカップに口をつけた。この料理人が火傷するほどの温度に設定するはずもなく、ミアは一気にそれを飲み干す。音をたててテーブルに置き、乱暴に口元を拭いた。

「ミアちゃん、落ち着いた？」

テーブルに両肘をつき、怜が問う。同時に、ごく自然に、背後の相棒に情報を伝えた。この少女が「ミア」であったのかと、莉啓はかすかに眉を上げる。そういうことなら、誘拐まがいの行為もわからなくはない。

ミアは一瞬だけ怜を見て、それから目を逸らした。

「あたしは最初から落ち着いてんだ。最初から、そのつもりで行った。覚悟があつたんだ」

「ガダル＝アルゲードを殺す覚悟が？」

「そつだよ！」

叫んだ拍子につばが飛ぶ。怜は器用にそれを避けた。

「なら、浅はかさを知ることだね。あれじゃ、身売りに行った世間知らずだよ。本当に殺したいなら、もっと周到になった方がいい」

「そんなこと！」

テーブルを叩きつけ、ミアが吠える。勢いのまま続けようとして、怜と莉啓との、真剣な眼差しに気づいた。一瞬気圧されたように眉を下げたが、それでも腹に力を入れて、続けた。

「そんなことは、どうだっていいんだ。売られるのならそれでもよかった。そんなことをしたら、アイツは実の娘を売り物にした最低な男だ。それならそれでよかった。それにあたしは、どうしても、どうしても——」

声に涙が混じった。血が滲むほどに唇を噛みしめ、それでも足りないとはかりに、ミアは両の拳を握りしめた。

「——アイツが許せないんだ。アイツがだめにした、なにかもをだめにした。過去だけじゃない、いまだって、ぜんぶ、何もかもだ！ だからあたしは、アイツを殺すんだ。何度だって殺すんだ。何度失敗したって、それでママが救われるなら、あたしは——！」
ぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。

怜はその背中をさすってやりながら、重要な問いを口にした。

「以前にも、ガダル・アルゲードを？」

「殺した！ 殺したんだ！ けどそれがだめで、うまくいかなくて、だからあたしは——！」

「悠良は」

怜の問いに、莉啓は迅速に答えた。

「二階だ。急ごう」

「——じゃあ俺は、役者を揃えるかな」

怜は立ち上がり、床を蹴った。

*

「さあミア、新しいお洋服よ」

買ったばかりの衣装の数々を、ベッドに広げた。手入れする人間がないので、皺一つないとはいいがたかったが、それでも丁寧に伸ばされたシャツの上に、そっと人形を横たえる。のぞき込むようにして、クレシアは人形の髪に触れた。

「どれがいいかしら。白が似合うわね。でも、こっちのリボンもかわいいわ」

愛おしそうに目を細め、一つ一つあてがっていく。人形はぴくりとも動かないが、クレシアは会話さえしているかのようなだった。

「あら、でもママは、赤だって好きよ。そんなこといわないで。ミアはかわいいから、なんだって似合うわ。あなたの銀の髪は、どの色にも映えるのよ」

最終的には、最初に手にしていた白の総レースに落ち着いたようだった。丁寧に丁寧に、強く触れてしまっただけは壊れてしまう宝物を扱うかのように、衣服を着せ替えていく。花嫁のそれを彷彿とさせる白いドレスを着せ終えると、小さな手袋に手を通した。髪飾りを結わえる。

「よく似合うわ、ミア」

クレシアは人形を抱き上げ、白く固い頬に、口づけた。

その様子を、部屋の片隅で、悠良はずっと見ていた。本当は、部屋の前を通り過ぎて、与えられている客室に引っこ込むつもりだったが、しかし、部屋の扉も閉めずに、ひとり話し始めてしまったクレシアから、目が離せなくなってしまったのだ。

彼女は悠良の存在など、気にも留めていないようだった。

ただ人形を見つめ、愛でていた。

「失礼な質問だとは思いますが」

その様子に、悠良はもう、聞かすにはいらなくなっていた。ミアという名は、この町のものなら知っただけでもおかしくない。有名な名だ。アルゲード家そのものがサリエルを代表する商家で、生まれた子がその跡取りとなるかもしれない以上、クレシアの出産には少なからず町の関心が寄せられていたのだ。

「あら、ユラさん。どうしたの」

クレシアはふり返り、微笑んだ。その目は悠良を見ているようでどこか遠くを見ているようでもあった。

いざ聞き返されてしまったては、どう質問を投げたものか、悠良は逡巡してしまった。娘さんは亡くなられたのですよね——まさかそんなストレートな問いかけをするわけにもいかない。

「……その、お人形は。ミリアちゃんと、いうのですか？」

結局、そんな問いに落ち着く。クレシアは目を瞬かせた。

「名前？ そうね、そういうことになるのかしら。でも、この子はミリアじゃないのよ。ミリアはね、もっとかわいいの」

澄んだ瞳で、小首をかしげるようにして、クレシアはくすぐったそうに笑う。

その瞳に捉えられたように、悠良は動けなくなってしまった。

この瞳を知っている。「仕事」をする上で、幾度となく、対峙してきた瞳。そこに映るものを何一つ疑わず、しかし本当の意味では何もかもを信じない、まっすぐな瞳。

悠良は首を振った。

このままでいいはずがなかった。

このままでは、あまりにも、悲しい。

「あなたは、どうして」

言葉が続かない。

なんと尋ねればいいのかだろう。

あなたは どうして——

見つめようとしないの。認めようとしないの。逃げているの。

ここに、いるの。

「ミリアは死んだのよ」

笑顔はそのまま、歌うように、クレシアは告げた。

「死んでしまったの。だからもう、ここにはいないの。これは偽物よ。ただのお人形。ミリアは生まれてきたけれど、幸せだったけれど、でもここにはいなかったの。本当は、いなかったの」

クレシアは人形の頭部を握りしめた。

細い腕を少しよじるだけで、その小さな頭は、ひどく容易に首から抜け落ちた。

使い終わってしまった紙くずを放るように、ごく小さな拳動で、頭をベッドに投げる。銀の髪が遅れて降りて、青い瞳を隠したが、クレシアの目にはすでにその姿は映っていなかった。

「かわいいそんなミーア」

クレシアは、小さく小さくつぶやいた。

その声は場にそぐわないほど落ちていて、涙がこぼれ落ちる様子はなかった。

「わたしはぜんぶ知っているの」

もう一度、悠良を射抜く。意志のはっきりと宿った目で、固い声で、つぶやいた。

「知っているのよ、悠良さん。でも、怖い。怖いよ」

「では、この子は」

第三者の声が割り込んだ。

莉啓が、ミーアを支えるようにして、扉の前にいた。

背中を押され、ミーアが一步、前に出る。震える瞳で、クレシアを見上げている。

その姿に、悠良は息を飲んだ。

クレシアの愛でている人形の「ミーア」と、恐ろしく酷似していた。銀の髪、青い瞳。白く透き通る肌。

ただ、そのすぐるような瞳は、人形にはなかったものだ。

空気を沈めるような落ち着いた声で、莉啓は続けた。

「この子は、あなたの娘ではないのですか」

「あら、ミーア」

クレシアは、そつと膝を屈めた。ミーアを迎え入れようと、満面の笑みで、両手を広げる。

「ミーアじゃないの。久しぶりね、どうしていたの。ママ、とっても寂しかったのよ。かわいいミーア。かわいいそんなミーア」

ミーアの足先が、かすかに身じろぎする。それから助けを求めるような目を、一瞬だったが、莉啓に向けた。

「ママ」

声が強ばる。

一歩一歩と、クレシアが歩を進める。

抱きしめられる瞬間に、ミーアは覚悟するように瞳を閉じた。ほぼ同時に、クレシアは小さな少女の身体を突き飛ばした。

「かわいそうなミーア！ ここにも、なんてかわいそうなミーア。ばかな人。かわいそうなミーア。ああ、なんてかわいそうなの。あなたはなぜ、ここにいるの。なんのために、ここにいるの。幸せになるためじゃなかったの。幸せになるために、生まれてきたんじゃないかったの」

「あたしは、ミーアだよ、ママ」

ミーアは訴えた。必死の言葉は涙に混じったが、それでも伝えたことを形にして、ミーアは声を絞り出した。

「あたしだって、ミーアに生まれたかった。あたしを生んだのが誰かは知らないけど、どうせ捨てられたいらない子だけど——でもクレシアさんが、ママが、あたしを見つけてくれて、本当に嬉しかったんだ。住む場所をくれたとか、綺麗な洋服をくれたとか、そういうことじゃなくて。生きていいんだっていわれたみたいで、本当に、本当に嬉しかった。だからあたしは、ミーアになりたくて。ぜんぶを変えてしまいたくて。だからアイツを殺したのに、だからアイツを殺そうと——」

殺そうと。

ミーアは、目を見開いた。

思い出してはいけない何かが、記憶の片隅で、重い頭をもたげていた。

ああ、顔を上げないで。

こっちを向かないで。

あたしを見ないで。

どうか、思い出させないで――

「ママはぜんぶ知ってるのよ」

ひどく柔らかい言葉を、呪文のような甘い声で投げかけて、クレシアはふわりと微笑んだ。

ミーアの涙を親指で拭い、頬を撫でる。笑みの形の瞳からは、涙が流れることなどないように思われたが、ミーアは知っていた。彼女は泣いているのだ。

ずっとずっと、泣いているのだ。

「けれど、怖い」

まだ動き始めない翡翠の小麦亭の正面から、怜は堂々と足を踏み入れた。日が暮れていない間は見張りもいないが、そもそも怜にとつて、見張りや鍵の類は意味をなさない。

両手をポケットに突っ込んで、長い棒を小脇に抱え、軽快に階段を駆け上がっていく。正面から入ったことで数人に見咎められたが、面倒なことになる前に早々に睡眠を提供した。棒で一撃だ。

「こんにちは、ガダル」アルゲードさん」

三階の自室らしき場所で、目的の人物を見つけた。他の部屋ほどの装飾はなく、簡易なソファセットと棚が並ぶだけの、どちらかというとどこんまりとした部屋だ。ガダルの私物と思われる本やカッブなどが、あちらこちらに置かれている。

ガダル「アルゲードは、ひとりでソファに横になり、腕で目を押さえるようにして、じっと、動かずにいた。

「またおまえか。あの娘のことは話がついただろう」

ガダルは、いまは茶の上下に着替えていた。寝間着を思わせる楽なものではあったが、そのぞろりとした形態は、この地方ではあまり見ないものだ。交易でどこから仕入れた、特別な衣服なのかもしれない。

だがもちろん、そんなことは怜の関心を引かなかった。それよりも言葉の中身に、思わず唇の端を上げた。

「ああ、そういう考え方は好きだなあ。深追いせず。ガダルさんの商売がうまくいくの、わかる気がする」

「そんな世間話をしに？」

「まさか」

怜の笑みにつられたわけでもないだろうが、ガダルも薄く笑うようにして、身体を起こした。ソファに深く座り直し、両手を膝の上で組むと、疲れたように息を吐き出す。

「では説教か、若造が。クレシアに雇われでもしたか。ミアというのは、どうせクレシアの狂乱の産物だろう。あの子もかわいそうに。見知らぬ人間の形扱いか」

怜は眉を上げ、ガダルのかい腰を下ろした。

「てつきり、ミアちゃんの実の娘なのかと。違うの？」

「馬鹿な。ミアはずっと昔に死んだ。あれ以来、クレシアは子を産んでいない」

「ガダルさんの、って意味だけど」

ガダルは怜の瞳を見つめ、そのまましばらく、口を閉ざした。

怜の言葉の意味がわからなかったわけではないだろうが、その内容を、時間をかけて吟味しているようでもあった。

「それこそ、くだらない」

数秒ののち、吐き捨てた。

「俺の娘、だと。そんなものはいくらでもいるだろうし、また、ひとりもないだろう。そういうものだ。女が俺の娘といったところで、確証などどこにもない。確証があったところで、ほんの数年生きただけで死んでしまう命かもしれないのだ。くだらない。そんなものに、俺は縛られない」

怜は黙って、聞いていた。彼の言葉は、怜を不快にさせることはなかった。それほど何かを込めて聞くべき言葉だと、最初から思っていないのだ。

「ガダルさんにとって、クレシアさんは、何なの」

少なくとも、名目上は妻であるはずの、クレシア・アルゲード。

しかし、ガダルがアルゲード邸に寄りつく素振りにはなかった。もうどれほど長い間帰っていないのか、それこそ見当もつかない。

アルゲード家はクレシア側の家だ。若いころから地道に商いをしていたガダルは、そもそもが家名と財力を目当てに、アルゲード家に入ったと噂される。少し調べただけで、彼に関する良くない話はいくらか出てくる。結婚よりも前から、ガダルには悪意にする女があったらしい。複数だ。

だが、怜の予想に反して、ガダルはひどく辛そうな顔をした。しかしそれは、本当に一瞬のことだった。すぐに表情を打ち消すと、首を振る。言葉は発せられない。

「――一ヶ月前に」

怜は、質問を変えた。

「何があつたのか、教えてもらえる？」

ガダルは、怜の瞳を見た。

不意をつかれたような表情で、そのまま沈黙した。

一ヶ月前。

脳裏に蘇るのは、きらめく鮮やかな刃。同じ色の、決意に燃える長い髪。

自分の名を呼ぶ声。

ひどく聞き慣れた、あたたかい、しかし苦痛を伴う、声。

そして、鮮血。

涙。

*

――愛しているよ、愛しているよ。

囁く声を、いまでも覚えている。

――幸せにするよ。いつしよに、幸せになろう。

約束は、いまでも色あせない。

――ああ、ぼくらは……

あたたかい瞳で告げた、ひどく脆い、甘い声。

——幸せだね。

思い出すだけで、こんなにも胸に溢れる。
信じて疑わなかった、愚かな自分。

結局はひとりで生きていた、哀れな虚構の世界。
それでも、いつだって、思い出せるのだ。

——とてもとても、幸せだね。

僕らは本当に、幸せな家族だね。

「幸せだと思っていたわ」

クレシアは膝をつき、ミアの銀色の髪に触れた。両手で頬を撫で、青い瞳の輪郭を描くように、親指で優しくなぞっていく。

「幸せだと思っていた。朝起きて、三人で食卓を囲んで、ガダルを見送って。ミアとお出かけして、パパはいまごろ何をしているかしらって、そんな他愛のない会話をして。その間、あの人が他の女の子を抱いて、生きた命を売り歩いて、そうして得たお金を持ち帰ってきているなんて知らないで。わたしだけ、本当に何も知らないで」

見開かれた瞳から、涙は流れ出なかった。

震える手で、クレシアは少女を抱きしめた。強く強く、骨がきしむほどに。

「あなたを拾ったのは、わたしの償い。自己満足よ。あなたは他人よ。似ているだけの他人。被害者よ。わたしの虚構に巻き込まれて

しまったのね。なんてかわいそうなミリア」

「それでもあたしは——」

ミリアは言葉を飲み込んだ。

この壊れそうな人に、母と決めた人に、幾度同じ言葉を伝えただろう。いくら形にしても足りない感謝を、どれほど伝えただろう。

それでも伝わらないのだ。

クレシアは、虚構の中にいた。

彼女にとって、何もかもが作り物だった。

作り物の中に入ってしまったのでは、どれほど丁寧に形作った言葉も、何もかも、虚構を構成する一つにしかなり得なかった。

「だからあたしは……殺そうとしたんだ……一ヶ月前、ちょうど今日みたいに決意して、翡翠の小麦亭に向かった。そう、そうだ——どうして忘れていたんだろう。どうして、思い出してしまったんだろう」

抱きしめるクレシアの腕を、少女の涙が濡らす。

ただ、クレシアを解放したい一心で。

幸せになってもらいたいと、それだけで。

愚かにも、人殺しを企てた。それが何を意味するのか、深く考えもせずに。

「——そこに、居合わせてしまったの？」

いつのまにか、クレシアとミリアとを残し、景色のすべてが消えてしまったかのようにだった。

すべてが闇の奥に落ちていつてしまったみたいに、いまいる場所だけが、浮き彫りにされた。クレシアが顔を上げると、そこには見慣れた部屋も、人形のミリアもいなかった。

悠良が、見下ろしていた。

その向こうで、感情のない瞳で、莉啓がこちらを見ていた。

「その時に何もかもが終わってしまったのに、それでも、認められないの？」

「終わった？」

クレシアがくり返す。

終わった、という言葉。

それは遠い言葉ではない。クレシアの中では、ひどく大事なものがもう幾つも——ひよっとしたら何もかもが、もうとっくに、終わってしまっていたのだ。

クレシアには、恐れるものなど何もないはずだった。

これ以上耳を塞ぎたいことなど、ないはずだった。

ではなぜ、認められない？

何が、怖い？

「一ヶ月前——ミアが、計画を決行しようとした日。時を同じくして、あなたもその場にいたはずだ。あなたはもう、思い出さないとけない」

「わたしはぜんぶ知っているわ」

莉啓の言葉に、クレシアは緩やかに首を振る。

知っているのだ。

本当は、ぜんぶ知っているのだ。

一ヶ月前、ミアが愚かな計画を胸に、ガダルの元へ向かったのだと知った。ミアの世話を任せている別宅から血相を変えて使用者が訪れ、そう告げた。

「わたし、気が気じゃなくて——これ以上愛する人を失うのかと思うと、いてもたってもいられなくて——すぐに行かなきゃ、止めなきゃ、止めなきゃ、止めなきゃ、止めなきゃ、止めなきゃ……」

ぶつりと、言葉が途切れた。

莉啓のさらに向こう側に、ガダル＝アルゲードの姿があった。

怜と共に現れたガダルは、彼女の姿に、すべてを察したようだった。愕然と目を見開き、ひどく長い時間をかけて、ひざをつく。

そうして、つぶやいた。

「どうして、俺をかばったんだ」

身体中の後悔を込めたような、小さな小さな、つぶやきだった。だがその一言で、クレシアは、もうこれ以上逃れられないことを

知った。

思い出してしまった。

だれよりも愛した、あの人が。

いまでも鮮明に思い出せる。

殺してやると叫んで、地を蹴ったミア。

突然のことに、立ちすくむガダル。

クレシアは、その間に飛び込んだ。

刃が、腹を貫く。

そんなことはどうでも良かった。

死んでしまうことに、恐怖などなかった。

愛する二人を守れたのなら、それがクレシアにとっての最良だった。

それでも、認めるわけにはいかなかった。

どうしても、怖かったのだ。

愛する人。ずっとずっと、愛している人。

「あなたには、愛なんて、なかったのかもしれないけど――」

クレシアはガダルを見つめた。すべてを認めたその瞳から、やつと涙が落ちた。

「私は本当に、幸せでした。ミアだって、生きている間は絶対に、本当に、幸せでした。全身で、あなたを愛していました。本当に、幸せでした」

まるで何かにいい聞かせるかのように、ゆっくりと、言葉を紡いだ。銀色の髪の少女が、泣きじゃくりながらしがみついていたが、もうそれにも気づかなかった。

感覚が薄れてきていた。

認めてしまったのだ。

魂が、認めてしまった。もうこれ以上、ここにはいられない。

「もしかしたら、騙っていたのねって、愛なんてなかったのねって、あなたの頬を叩くのが、本当なのかもしれない。けれど、上手に上手に騙されて、虚構であつたのだとわかってても、やっぱり私は幸せだったの。幸せだった事実は、やっぱりなくなるわけではなかったの。ミーアが死んでしまつて、あなたは本当に帰つてこなくなつてしまつたけど、それでもそれまでの私は、確かに幸せだったの」

クレシアは、銀色の髪を撫でた。そこに何かを、失つた愛する命を重ねているわけでは、もうなかった。それでも愛おしそうに目を細め、額にキスをした。

「すべてが虚構なら、ミーアはいつたい何だつたんだろう、あの子は何のために生まれて、死んでしまつたんだろう」――そんなふうにも思うわ。嘆きもしたわ。けどあの子も馬鹿だから、わたしといつしよで愚かだから、本当に何も知らなかったの。何も知らずに、ただただ幸せでいたの」

クレシアは、顔を上げた。

ガダル顔を見ることはどうしてもできなかったが、その姿を、ずっと見てきた姿を、捉えた。

背は高いが、引き締まつているとはいえない体格。

昔からこだわっているあごひげだつて、クレシアにいわせれば、いったいどこがいいのかわからない。

ついでにいつてしまえば、センスも最悪だ。新しいものを取り入れようと、見たことのないものにばかり目を輝かせて、結局は浮いてしまう服や靴の数々。

どうして女が絶えないのか、不思議に思うほどの。

愛おしくて、涙が出た。

でも、と、クレシアは続けた。

「でもあなたは、幸せではなかったのよね」
涙が途絶えた。

最後だとわかっていた。伝えたかったことを告げようと、クレシアは懸命に、言葉を紡いだ。

「あなたは私たちを幸せにしてくれたけど、あなたはずっと、やってはいけないことをしていたわ。それって、苦痛だったでしょう。幸せでは、なかったでしょう、どうしても」

クレシアは立ち上がった。

ガダルの前まで歩み寄り、顔は見ないように、両手で頬に触れた。懐かしいあごひげに触れ、笑みをこぼす。

「それが、残念でならない」

それは、自嘲の笑みだった。

「怖かったの。私が死ぬのを見て、あなたがほっとしたらどうしようって。清々したって顔をしていたら、どうしようって。だから認められなかったの。未練なんてひとつもないのにね」

最後に息を飲み、意を決して、瞳を上げる。

愛する人の顔を、正面から、確かに見た。

ふっと、クレシアの頬がゆるんだ。

「ばかねえ」

それが、限界だった。

彼女の輪郭は光にとけ込み、あとにはもう、何も残らなかった。

銀色の髪の少女が、床に膝をつき、声を殺して泣いている。

長い沈黙を挟み、ガダルは踵を返した。重い足跡が、部屋から遠ざかった。

幻だった一ヶ月が空に立ち上り、気まぐれに吹いた風が記憶の月日を運び去る。

日常のサリエル、日常のアルゲード邸。

朝が始まれば、いつものように扉を開けた使用人たちが、その惨状を目にするのだろう。

人形と横たわる、もう決して動かない館の主人。

幸せだったと唱え続けた、クレシア「アルゲードを。」

「さ、おいしいもんでも食べて、次行くかー」

怜が両手を頭のうしろで組んで、器用に長い棒を携えて、軽快に歩いていく。

もう入ることもないアルゲード邸を見上げていた悠良は、一度だけ瞳を閉じ、前を向いた。先頭に行くのが怜であることに不快そうに眉をひそめ、歩き出す。莉啓もすぐに、悠良の隣に並んだ。

「ガダル」アルゲードは……」

何かを口にしようとしたのだが、うまく言葉にならなかった。莉啓は言葉を飲み込み、首を振る。

目線はこれから行く道を捉えたままで、冷淡に悠良が答えた。
「変わらないわ」

そこに感情はこもっていなかった。事実として知っている、そういう口調だ。

死んでしまったという現実を受け入れられない魂、理由に縛りつけられ、地上に固執し、彷徨うことしか許されない魂——それを導

くのが、彼らの役目。

生きている人間を罰すること、正すこと、導くことは、決して、
彼らの業ではない。

おごつてはいけない。

光を見てはいけない。

死した人間の魂が、どれほどの時を過ごそうとも、結局は変えられないのだ。

彼女は何を期待したのだろう。

恐れだけではなかったはずだ。確かな期待があったはずだ。

結局はそれを、口にすることはなかったけれど。

「ばかね」

気丈なままで、悠良がつぶやく。

怜が立ち止まり、振り向いて、待っている。

それが当然のことであるかのように、隣に莉啓がいる。

ほんの少しだけ口元をゆるめたが、気を抜いてしまったら何か
こぼれ落ちてしまいそうだった。

悠良は足を速めるようなことはしなかった。

踏みしめるものを確かに感じて、まっすぐに前を向いて、動き出
した町をあとにする。

彼らは旅立つ。

彷徨える魂の元へ――

4（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

『彷徨うもの、導くもの。』『加害』『恋人』『【ERRANT】』
に続く、二年ぶりのエランシリーズとなりました。

もう完結のつもりでおりましたが、あたたかいお言葉に励まされ、
こうしてまた彼らに逢えたことをとても嬉しく思います。
本当に、ありがとうございました。

「エランシリーズ」は、悠良、莉啓、怜の登場するファンタジー
シリーズです。リンクから一覧へ行けますので、よろしければご覧
ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8326e/>

虚構

2010年10月8日15時21分発行